
すたんどばいみー

にやる男！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すたんどばいみー

【Nコード】

N5202H

【作者名】

にやる男！

【あらすじ】

当時17歳だった俺は、田舎に住んでいた。それ自体が嫌悪の対象で、いつか抜け出したいと願っていた。必ずここから逃げ出してやる。そう思った俺は家出を決行することになる。ちなみにカメモシは準主役です。

0、振り返るとセミの鳴き声とカメムシの臭さ

今から数年前のことだった。

田舎に住んでいた俺は、都会というものに無性に憧れた。
ネオン、喧騒、人、乗り物、建造物。

田舎にそういうものがなかったからかもしれない。
もしかしたら子供の好奇心だったのかもしれない。

どちらにしろ、俺は都会に憧れていた。

田舎には、何も無い。

正確にいうと、あるにはあるが不便だ。

コンビニ1つにしろ、何十分先を探す羽目になる。

何しろバスが1時間に1本のペースでしか運行していないし。

とにかく不便だった。

移動手段はもっぱら自転車か徒歩。

学生なんてそんなもんなのだろうか。

でも俺はそんな生活に嫌気がさしていた。

「いつかこの街を出たい」

いつしかその思いは強く、強くなっていった。

0、振り返るとセミの鳴き声とカメムシの臭さ

その日も、晴れていた。

俺の住んでいる地域は比較的海抜の高いところにある。

夏になれば一面緑、緑、緑。

冬になったらなつたで真つ白以外の色がないところだった。

こういう風景だけなら涼しく過ごしやすい土地を想像しがちだが、実際はそうではない。

辺りを山々に囲まれている為、非常に盆地に近い。

夏の最高気温はゆうに30度を突破するし、記憶が確かならその夏の最高気温は35度だった。

幸いなのはジリジリ照り付ける太陽も、木陰に入ってしまったえばなんてことはないことぐらいだろうか。

何せ、家の前、横、後ろが山なのだから木陰なら申し分ないほどたくさんある。

夜になるとカブトムシやクワガタが網戸にぶつかってくることもしばあった。

今考えるとんでもないほど緑が多い地域だったのだろうと思う。

ただ、俺はそれが嫌いだった。

セミは五月蠅いだけ、どこにいくにしても不便。

遊ぶところも無く、行っても川か山かそこら辺。

公民館なんていう洒落たところもあったが、暑さに負けたときの避暑地になるという機能しかしていなかった。

そしてその地域で一番嫌いな「モノ」が

害虫である「カメムシ」様だった。

都会ではあまり目にしないであろうこの生物、詳しくは虫。

何が害虫なのかといったらその臭いだろう。

触れる、ただそれだけでこいつらは常識を逸脱した臭いを発する。なんていったらいいのだろうか、ゴムの焼けた臭いが若葉の香りと混ざって発酵した臭いともいうのだろうか。

それはそれは形容し難い臭いだった。

ひとたび触れてしまえばその臭いはとれないし、外に干している洗濯物にもつく。

特に白い色がお好みらしい。

一度やったのが白いTシャツを確認せずに着てしまい、その日一日外出できずに軽く鬱になった覚えがある。

かといって部屋干ししていれば、どこから入ったのかまた付いている。

それぐらい厄介だった。

思春期真っ盛りだった俺にはこの世で2番目に嫌いなものだったかもしれない。

いや、大嫌いだった。間違いなく。

セミの鳴き声、カメムシの臭い、川のせせらぎ、木々が触れ合う音。そんな中に囲まれてた俺は不幸だった。劇中の悲劇とでもいうべきか。

今思い返せば、一番幸せだったのかもしれないけれど。

1、2日間だけ俺TUEEE - いち -

1

そういえばバイトだった。

動くのも億劫なトド状態だった俺を動かしたのはバイトという文字が頭をよぎったからだった。

俺は1年前に高校を辞めている。

理由は多々ある、が、割愛することにしよう。

そして晴れてフリーターぷー太郎伝説が幕を開けたわけだ。

学歴？何それ食えるの？状態に陥っていた俺は危機感なんてまったくなかった。

どうせこの田舎で一生を過ごして朽ちていくのだろうと思っていたからだ。

田舎というぐらいだから、俺の地域は村だ。

広義でいうと郡なんだが考えても考えても村だから村でいいや。

俺のバイト先はそんな小さな村の小さなホテルというか旅館とかの洗い場と布団敷きだ。

外観だけ見たらどこをどう見てもホテルなんだろうけど（プールもついてるし）部屋は和室しか存在しない。

ホテルマンといたら聞こえがいいかもしれないが、やってることはベッドメイクなんかじゃなくただ畳に布団を敷くだけだから、胸も張れない。

ただ、休むわけにもいかないからいくしかない。
そんな感じで毎日バイトに行っていた。

その甲斐あってかいつもは夜からのバイトなのだが、プールサイドの露店や朝からの掃除の話もちろはら入ってきていた。

実際はがんばってるところを評価されたわけでもなんでもない。

良く言えば仕事が出来る。

悪く言えば自給が安くあがる出来のいいバイト。

ただ、それだけだった。

俺の同級生にあたる奴らはだいたい街にバイトにいつている為、こんな辺境の地でバイトをしようなんざ、誰も思わなかったんだろう。結局人手不足なだけだった。

手に持っていた漫画を本棚にしまうと、バイトの準備を始めた。
準備といってもタオルをもっていくぐらいなものなんだが。

行く前に何か食べようと思い、俺は居間に向かった。

バイト先ではまかないらしきものが出るのだが、それまで持たないのが成長期の男子たるものだと思う。

が、居間に行っても何も見当たらない。

というか人がいない。

母親も父親も兄弟すらない。

「あれー？」

暢気な声を出しつつ、自分の食事そっちのけで搜索を続けるとテーブルの上に置手紙があった。

『俺へ

今日から旅行にいつてきます

食い物は冷蔵庫に入ってるから適当に食べてくれ

戸締りはちゃんとしろよ

父』

「ああん？」

そつえば2、3日前にそんな会話をした気もする。

母方の実家だかに2日ぐらい行ってくるっていつてたっけ。

家族の重圧から開放される、俺勝ち組グッジョブとか思案をしながら時計を見ると、バイトの時間が迫っていることに気が付いた。

「うわ、やべっ」

俺はその一言だけ残し、家を出た。

あれ、鍵閉めたっけな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5202h/>

すたんどばいみー

2010年10月10日03時56分発行